



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2608 号 2015.8.31 発行

余録：絵記号や写真、簡潔な文を使い、知的障害者が… 毎日新聞 2015年08月31日

絵記号や写真、簡潔な文を使い、知的障害者が楽しく読めるよう工夫したスウェーデン発祥の「LLブック」を広めたい。特別支援教育に携わる大和（やまと）大（大阪府吹田市）教授の藤澤和子（ふじさわ・かずこ）さんらが「わたしのかぞく なにが起こるかな？」＝樹村房（じゅそんぼう）＝を出版した▲寝ぼけ眼のお父さんが娘のランドセルを持って出勤する。そういうクスッと笑える場面を写真で4コマ漫画風に表した。LLはスウェーデン語で「やさしく読める」という意味の略語だ。今回は兵庫県立ピッコロ劇団が協力し家族役の表情や動作がわかりやすくなった▲スウェーデンでは1960年代、健常者と同じように情報を得たいという障害者の思いに応じて国の支援で出版が始まり、毎年30点ぐらい出ている。高齢者や移民、認知症患者にも普及しつつある▲藤澤さんがLLブックの活用を考えたのは、障害者の保護者から「成長するにつれて読ませられる本がなくなる」と聞いたからだ。異性やスポーツ、芸能に関心を持って漢字や長い文章が苦手であきらめる人が多い▲日本では障害者支援団体などが制作しているが約70点とわずかで自立生活のノウハウ本が多い。エンターテインメントやラブストーリーも手がければ読書の楽しさをもっと知ってもらえると藤澤さんは言う▲来春施行される障害者差別解消法を紹介する国の冊子は、知的障害者にわかりやすく説明しないことは差別になると書いている。スーパーの商品表示やバス乗り場の案内に絵文字を使えば、お年寄りや子供、外国人にもよくわかる。誰にでもやさしい社会の実現に向けて取り組むことはいくらでもある。

社説：多様な学び法案／「学校外教育」を前向きに 神戸新聞 2015年8月31日

不登校の小中学生が通うフリースクールなど学校以外の学びの場を義務教育に位置付ける「多様な教育機会確保法案」が、議員立法で今国会に提出される見通しとなった。実現すれば、学校教育法が認める小中学校などに通わせることを義務付けてきた就学義務の大転換となる。

自党内には「義務教育は学校が担うべきだ」との反対意見が根強く、曲折も予想される。だが、学校復帰を前提とした不登校対策の行き詰まりは明らかだ。不登校の小中学生が12万人を超える一方、学校には行けなくてもフリースクールなどで能力を伸ばす子もいる。

多様な学びの場を正式に認めることで、学校に通えない罪悪感や将来への不安から解放される子や親がいる。民間と行政が連携した幅広い支援も可能になる。すべての子どもの学ぶ権利を保障するため、具体的な法整備を急ぐべきだ。

法案は超党派の議員連盟が関係団体の意見も参考に作成した。保護者が「個別学習計画」を作り、市町村教育委員会が認定すれば学ぶ場が学校外でも就学義務を果たしたと見なす。国と自治体による財政支援のほか、教委などによる定期的な訪問と助言など教育の質を確保する対策も盛り込んだ。

フリースクールなどの民間教育団体は全国で400を超える。それぞれの地道な活動が

政治を動かし、法案に結実した格好だ。法案成立に向けて、各団体が多様性や自主性を損なわず、教育の質を確保できるような制度設計を進めてもらいたい。

文部科学省による初の実態調査では、フリースクールなどを取り巻く厳しい環境も明らかになった。

民間の教育団体に通う子どもは3月時点で4196人。うち4割以上が本来在籍する小中学校で出席扱いになっていなかった。授業料は平均月額3万3千円と保護者負担は重い。スタッフの約3割は無給で、運営資金や人材確保に悩む団体が少なくない。その役割を認め、国の責任で財政支援に踏み込むべきだ。

ただ、財政支援と引き換えに「第2の学校化」が進むようでは、子どもの自由な居場所を奪う恐れもある。行政の過度な介入を招かないために民間団体側の自助努力は欠かせない。教育の質を高めるノウハウの共有や人材育成に連携して取り組む必要がある。

<仙台いじめ自殺>説明責任果たさぬ学校

河北新報 2015年8月29日

中1男子の自殺に至る経緯と市教委、学校の主な対応	2014年	
	4月	中学入学
	5月～	登校を渋り、休みがちになった
	5月	掃除の時間に友人たちからかわれ、泣きだした
	6月	LINEにアイドルと合成した画像が流された
	7月	友人グループから仲間外れにされた。学校が関係生徒を集めて男子に謝る場を設けたが、友人らから「チクった」と言われた
	8月	夏休み明けに「変態」「寝癖がひどい」とからかわれた
	9月	生徒が校内いじめ調査でアンケートを出さず
	同下旬	自殺の前日と当日に「部活をやめたい」「転校したい」と保護者に話す
	11月	仙台市教委が第三者委員会に諮問
	2015年	
	6月	第三者委が14回の会議や教職員、関係生徒の聞き取りを基に答申
	8月	
	21日	市教委が今回の問題を公表
	22日	市教委が臨時校長会
24日	学校が臨時全校集会。市教委が定例教育委員会で報告	
25日	市の総合教育会議でいじめ対策の強化を確認	

◎届かなかった叫び(上) 沈黙

<具体名覆い隠す>

具体名をひたすら覆い隠す記者会見だった。仙台市教委は21日夕、仙台市立中1年の男子生徒＝当時(12)＝が自殺していたことを明らかにした。

「昨年、市立中1年の男子生徒が自殺した」「第三者委員会の調査で、校内のいじめが自殺と関連性があるとされた」

市教委が市役所で開いた会見で説明したのは、この2点がほぼ全て。男子生徒の氏名や年齢、学校名はもとより、実際には昨年9月下旬だった自殺の時期を問う質問にも答えなかった。

詳しい説明は拒み、公表遅れの理由なども含め「遺族の意向」と繰り返した。

情報管理は徹底されていた。市教委が宮城県教委に報告したのは20日。発表前日のことだ。

「県教委と市教委の意思疎通が十分でなかったのは大変残念」。村井嘉浩知事が24日の定例記者会見で苦言を呈するほどだった。

仙台市議会の市民教育委員協議会で自殺の事実を報告する大越裕光教育長。1年近くたってから初めて公にした＝21日午後、仙台市役所

<生徒らも違和感>

市教委はその後、自主的に補足説明する場を設けていない。「事実公表した」「遺族の意向もくんだ」という体裁を整えたことで責任を果たしたかのようにも映る。

具体名を消し去った「生徒の死」は事実の重さを揺るがしかねない。

24日朝、男子生徒が通っていた学校であった臨時の全校集会。校長が読み上げたのは、市教委が全市立学校に配布した再発防止を訴える緊急アピール文だけ。自校でのことには一切触れなかった。

「自ら命を絶ってはならない。私たち大人が必ず皆さんを守る」。抽象化された言葉は違

和感を持って受け止められ「なんか違うくない？」とささやく生徒もいたという。

学校側も「事実をつまびらかにしない」という姿勢では一貫している。

男子生徒の自殺後、担任の女性教諭は「(男子生徒は)家の都合で転校しました」とクラスメートに説明。学校はいじめに加わったとされる11人の生徒に実態調査の過程で事実を伝えたものの、他の生徒への説明はいまだにない。

<「先生たち怖い」>

市教委の発表後、学校周辺で取材する報道関係者らに対しては、同校の教諭らが「うちの学校だという証拠があるのか」と否定を装った。

校長は「市教委に聞いてほしい」の一点張り。28日夜の河北新報社の取材には「駄目、駄目。警察呼びますよ」と拒否した。

市教委と学校は説明責任を果たしているのかどうか。「遺族の意向」を理由にした沈黙の前で、生徒や保護者の間では「本当のことが知りたい」との思いが膨らむ。ある生徒は「先生たちの対応が怖い」とつぶやく。

男子生徒は「いじめが収まらない」と自殺の直前に言い残していた。12歳の少年が絞り出した叫び声が、実体を持って受け止められずにいる。仙台市立中1年の男子生徒がいじめを苦しめて自ら命を絶った。学校や市教委の対応には問題点が次々と浮かび上がり、地域に疑問と不信が渦巻く。生徒の死は何を問い掛けているのか。経緯と現状を検証する。

(仙台・中1 いじめ自殺問題取材班)

<仙台いじめ自殺>生徒ら「何を信じたら」

河北新報 2015年8月30日

◎届かなかった叫び(中) 混乱

<「かん口令」敷く>

三つの注意事項が生徒たちの心を再び波立たせた。

「臆測で物を言わない」「個人情報を出さない」「個人情報を出すと名誉毀損(きそん)になる」

いじめを苦しめて自殺した仙台市立中1年の男子生徒＝当時(12)＝が通っていた中学校。市教委による事実関係の公表から4日後の25日、教諭たちが生徒に示したのは真実ではなかった。「事実上のかん口令」と生徒、保護者の多くが受け止めた。

「うちと決まったわけではない」(教頭)。「本当の事が知りたい」という生徒や保護者の切実な願いに、学校側はかたくなな態度を崩さない。

校長が自校であつたいじめ自殺に触れないまま、「命の重み」を説いた24日朝の臨時全校集会。ある生徒は、いじめに関与したとみられる生徒たちに反省するそぶりがなく、学校側は「もう駄目」とショックで寝込んでしまったという。

保護者は「先生たちはまるで人ごとのような態度。子どもたちは何を信じていいかわからなくなっている」と嘆く。

いじめを苦しめて自殺した男子生徒が通っていた中学校。学校は真相を明らかにせず、生徒たちに動揺が広がる＝仙台市

インターネット上では、学校名や所在地など真偽不明のさまざまな情報が飛び交い始めた。真実を明らかにしない市教委と学校の対応が臆測に次ぐ臆測を呼び、ネット空間の過熱に拍車を掛ける。

自殺した男子生徒と同級の中学2年生たちの間でも、無料通信アプリLINE(ライン)でいじめに関する詳しい情報が出回り、動揺が広がっている。

<肩身狭い思いも>

塾などでは「〇〇中学の生徒」とレッテルを貼られ、肩身の狭い思いをしている。保護



者の一人は「学校に行きたくないという生徒が大勢いる」と打ち明ける。

「地域に余計な動揺を与えるのを避けるため、公表したくなかった。要らぬ混乱を招いたのであれば大変申し訳ない」

自殺した男子生徒の両親は24日、あらためて談話を出した。混乱の責任を一手に背負おうとする痛々しさが文面ににじむ。

ある保護者は「愛する子どもが自殺した直後、親が冷静に対応できるはずがない。遺族の思いを、われわれは責めるべきではない」とかばう。

「昔からある学校側の事なかれ主義とその場しのぎの対応が、事態をより悪化させている」。住民の一人が地域の声を代弁する。

12歳の早すぎた死が問いかけた命の重み。混乱の渦中にある生徒、保護者、学校に疑心暗鬼が広がりつつある。

<仙台いじめ自殺> 「死」伏せ 説かれる「命」 河北新報 2015年8月31日



◎届かなかった叫び(下) 不信

自殺した男子生徒に関する調査結果報告書。男子生徒の保護者が学校に6回相談したが事態は改善せず、「学校の対応に問題があった」などと書かれている

<教訓生かされず>

電話の声は怒りで震えていた。

「いじめは報道された2件だけではない。学校では不登校やいじめが常態化し、(同級生が)

怖くて教室に入れず、廊下で給食を食べている生徒もいる」

仙台市立中1年の男子生徒＝当時(12)＝が昨年9月下旬、いじめを苦に自殺した問題。仙台市教委が21日に事実関係を公表して以降、河北新報社には保護者や学校関係者から悲痛な叫びが続々と寄せられている。

校長は「相談事例は数件あるが、いじめと認識しているものはない」と現時点でいじめの存在を否定。生徒、保護者との現状認識の差は広がる一方だ。

「怒り、寂しさ、悔しさで体が震えた。息子の死が教訓になっていない」

「生徒の死後もいじめが続いていた」と報じた25日、両親が電話取材に応じ、苦しい胸の内を明かした。

両親は息子の死後、「くれぐれもこのようなことがないように」と学校側に念を押し、いじめ根絶に向けた取り組みを託していた。

学校はその後もいじめの連鎖を止められず、自殺した男子生徒へのいじめをエスカレートさせたとされる「謝罪の会」を本年度も開くなど、教訓を生かした形跡はない。

両親は「息子の時と同じ対応でいいのか」と不信感を募らせる。

<「まさか2度も」>

この中学校では1998年にも中1の男子生徒＝当時(13)＝が自殺し、学区内では「いじめが一因になった」と公然と語られていた。「同じ地域で子どもの自殺が2度もあるなんて…」と、絶句する住民は少なくない。

「学校が問題をうやむやにするため、いじめが止まらない。自校で自殺があったことを認めず、踏み込んだ指導ができるのか」と住民の一人は危惧する。

昨年秋の男子生徒の自殺は「遺族の意向」を盾に、この学校では「なかったこと」にされた。教員らは「新聞はでたらめ。信じないように」と、生徒たちに説明しているという。

自殺した男子生徒について、「転校した」と事実と異なる説明を受けていた同級生たち。今も友人の死を悼む機会を奪われたまま、校長や教員たちから「命の尊さ」を説かれている。

真実を直視しないまま、いじめをなくす学校再生の青写真を描けるのだろうか。不信が

渦巻く学校に、きょうも生徒たちが通う。

夏休み明けに注意 子どもの心に何が

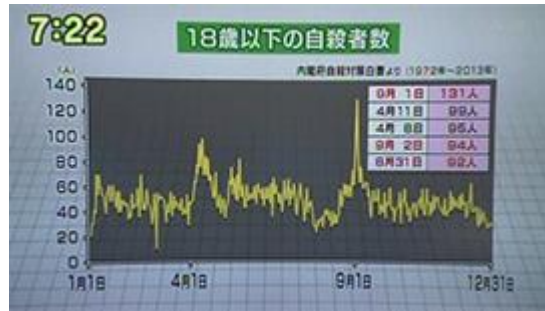


合原「18歳までの子どもの自殺について、亡くなった人数を日付ごとに内閣府が分析した結果です。およそ40年間で見ますと、突出しているのは9月1日。そして9月2日、8月31日と、夏休み明け前後が多くなっています。専門家の間では、さまざまな理由から子どもたちの心が不安定になる時期だと指摘されています。」

阿部「夏休みが終わり、2学期が始まるこの時期、子どもたちの心に何が起きているのか、取材しました。」



NHKおはよう日本 2015年8月28日 阿部「全国の学校では、夏休みが残りわずかというところが多いと思いますが、この時期、見過ごせないデータがあります。」



夏休み明けに注意 子どもの心に何が

都内のフリースクールに通う、渡邊昌樹（わたなべ・まさき）さん、19歳です。小学5年生の夏休みを境に、不登校になりました。友人が多く、成績も良かったという渡邊さん。ところが、その年の夏休みの終わり、残っていた宿題に全く手をつけられなくなりました。渡邊昌樹さん「まだ、こんなに宿題が残って

る。やらなきゃと思っているけれど、全然やる気がなくて。」

この頃、渡邊さんは中学受験のプレッシャーを感じていました。1学期は1日も休まず通学していましたが、夏休みを経て、気持ちが大きく変わったと言います。



渡邊昌樹さん「勝手に自分で悩んで、みたいな感じだった。プレッシャーがかかっている状態が、休みになることで解放されて、もうこのままの方がいい。それをもう一回学校に行くという日常に戻すのがつらかった。」

子どもたちからの電話相談を受け付けているNPOです。毎年8月の終わりが近づくにつ

れ、深刻な悩みの相談が急増すると言います。チャイルドラインあいち 高橋弘恵さん「夏休みが終わるころから新学期が始まったあたりは、子どもたちがすごくストレスを抱えているのを実感していて、勉強のこと、家庭のことが全部複合しているから、孤立してしまうし、自殺という選択にいつてしまう。」



阿部「取材にあたった岡本記者です。子どもたちの悩みというのは、夏休みが終わろうとしているこの時期に大きくなる傾向があると



ということですね？」

岡本記者「そうですね。子どもの自殺に詳しい日本自殺予防学会の阪中順子さんによりますと、夏休みというのは、悩みを抱えている子どもにとって少し心が解放される時間で、その夏休みが終わって久しぶりに学校に行く、ということが大きな壁のようになってしまうのではないかと思います。その結果、大人から見たらささいな悩みのように見えるものでも、子どもにとっては、自殺しか解決策がないのではないかと思いますというふうには追い詰められてしまうというケースがあるということです。」

合原「子どもの自殺の背景は、必ずしも、いじめだけではないんですね？」

岡本記者「いじめがあったかどうかには注目してしまいがちなんですが、背景には進路の悩みとか、家庭の問題などさまざまあって、それらいくつかの要因が複雑に関連していることが多いということも言われています。そして、自殺をしようというほどまで追い詰められている子どもというのは、なにかしらのシグナルを発するとされています。そのシグナルをつかもうという中学校の取り組みを取材しました。」



夏休み明けに注意 シグナルをつかめ

愛知県安城市の安城北中学校です。夏休み中でも生徒の小さな変化を見逃さないようにし



ようとしています。

1年生のクラスを受け持つ、石田綾 (いしだ・あや) 教諭です。この学校では、夏休み中の部活動をクラスの担任が訪ねて回り生徒に声をかけています。

石田綾教諭「顔色よくなったね。ちゃんと寝てる？」

石田綾教諭「髪切った？」



部活動の顧問の先生たちにも、生徒に変化がないか尋ねます。

顧問「部活の中でももめてることないし、家で何かっていうのも聞いてない。」

さらに、保護者とも頻繁に連絡をとって、家庭での変化もつかもうとしています。



石田綾教諭「安城北中学校の石田です、こんにちは。お兄ちゃん？お母さんいらっしゃる？」

石田綾教諭「夏休み、特に生活も変わる、交友関係も変わる、広がると。前半は部活も出ていたのに、後半は出てこれなくなったのは、絶対そこに何かある。相談しなさいよと言っても、特に中学生だとプライドも出てくるので、素直になかなか言えなかったり、言わないけれど“気づいて”という信号は出している。」



夏休み終盤に登校日を設けることで、2学期へのプレッシャーを和らげようとしている学校もあります。神戸市の葺合（ふきあい）中学校です。9月1日から始まる2学期に向け、8月下旬の3日間を登校日にしました。

特に注意しているのが、宿題の進み具合です。一人一人に声をかけながら、チェックします。担任「これ魚とか、どうしたん？とったん？」担任「どんな感じ、宿題の進み具合は？」生徒「(課外活動が忙しくて) 全く。」担任「全くできてない？ちょっとがんばらないかな。明日から、ちょっと時間作って一緒にやろうか。」



宿題を通して生徒の悩みや変化をくみ取り、生徒にとっても、2学期に向けて心の準備をできるようにすることが狙いです。

神戸市立葺合中学校 平井秀幸校長「子どもたちが2学期を迎えるにあたって、相談したいことがあったり、話したいことがあったりということで。学級担任、学年の(複数の)先生が拾い上げると、そのなかから子どもの変化を見ていくことも大事なと思う。」



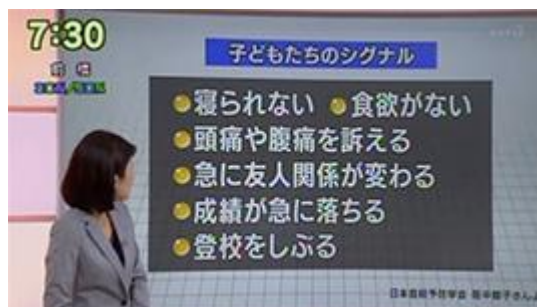
阿部「引き続き岡本記者です。学校のなかには、夏休み中に子どもと接点を持つことで、異変に気付こうとしているところがあるわけですね。では、家庭ではこの時期、どんなことに気をつければいいのでしょうか？」

岡本記者「例えば、自殺の危険性が迫ったときの子どもというのは、次のようなシグナルが見られることがありますと言います。寝られない、食欲がない、頭痛や腹痛を訴える、急に

友人関係が変わる、成績が急に落ちたり、登校をしぶる、ということです。ただ、これがすべてではありません。何かいつもと違うなという小さな変化を大切にしてほしいと言っています。」

合原「こうしたシグナルに気付いたら、どうすればいいのでしょうか？」

岡本記者「まずは『私はあなたのことが心配だよ』という気持ちを言葉に出して伝えること。そして、子どもの話をじっくりと聞くこ



とが大事だということです。ただ、そういった相談を受けた大人の側も1人で抱え込まずに、専門の相談機関や医療機関を頼ってほしいと思います。」

合原「その相談機関ですが、ご覧いただいているような相談機関があります。『チャイルドライン』は18歳以下の子ども専用。『24時間子供SOSダイヤル』は保護者からの相談も可能です。」

政府、保育料無償化の対象拡大を検討 平成28年度から段階的に

産経新聞 2015年8月31日

政府は子供が3人以上いる多子世帯支援の一環として、第3子以降の保育料無償化対象を拡大する方向で検討に入った。子育て世代の経済的な負担を軽くして少子化に歯止めをかける狙いがある。年末の平成28年度予算編成で、無償化拡充の裏付けとなる財源確保にメドがつけば、28年4月以降、段階的に対象を広げる方針だ。

現在、幼稚園の場合は第1子が小学3年生以下であれば、幼稚園に通う3歳以上の第2子と第3子のうち第3子以降の保育料が無料になる。保育園では第1子が小学校入学前の場合に限り、保育料は第1子が全額で第2子は半額を払い、第3子以降が無料となる。

厚生労働省によると、保育園児は全国で240万～250万人。うち第3子以降で保育料が無料の園児は、公立、私立合わせて約4万4500人（25年度時点）に上る。

ただ、幼稚園では第1子が小学4年以上になったり、保育園では第1子が小学校に入学したりすれば、第3子以降は無料ではなくなるという課題がある。

このため、政府内では、所得に応じて5～8段階に区分されている保育料のうち、まずは市町村民税が非課税の低所得者世帯を対象に、幼稚園は「第1子が小学3年以下」、保育園は「第1子が小学校入学前まで」という範囲外でも、第3子以降の無償化を継続する案が検討されている。

一方、第1子の年齢基準について、保育園で「第1子が小学3年以下」に引き上げることで、保育料が無料になる第3子以降を増やす案も浮上している。ただ、世帯の所得水準に応じて対象を段階的に引き上げる方が少ない財源で済み、地方自治体のシステム改修の手間もかからないという。

政府は多子世帯の支援に力を入れており、第3子以降の保育料無償化に関しては、子育て支援策を議論する政府の有識者会議が21日、「対象拡大に向けて財源を確保しつつ、取り組むべきだ」と提言していた。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

